

残り菊 (2024.4-2025.3)

外園重子

白南風や宇宙に行く舟出航す
行く春やすでに父母亡き故郷の家
女手に重き大樽梅漬ける
海霧深し添うて草食む母子馬
繕はぬ暮らしが寧し柚子の花
昼酒に句談義尽きぬ夏座敷
お仕着せを白地に換へて京の茶屋
身じろぎに香水ほのか句座の女
吹っ切れて籠の螢を野に放つ
ハイヒール濡れて銀座の梅雨入りかな
朝顔や藍を連ねて庇まで
積み上げし俵ずつしり今年米
少年のオカリナ涼し夕河原

生き死には神の領分いわし雲
二拍子で鳴らす鉄や松手入れ
汐浜に吊るす新巻き鋭き歯
身ひとつの今が幸せ残り菊
初母の胸はふくよか豊の秋
おでん鍋また煮返して独りなる
家猫の尾で返事する小春かな
浮寝鳥水尾にたゆたふ三番瀬
深川に閻魔大王座し小春
添書きに婚約告ぐる年賀状
月冴ゆる興亡ありし城の跡
春淡し卓布真白なレストラン
弔問の帰路を灯せり白椿
春愁ひ一本指でひくピアノ